

地方小都市における日本語教室 —日本人と外国人の関係性を中心に—

市川 恭子

1. はじめに

筆者は、2005年8月から2007年8月までの2年間、I県O市にあるボランティア日本語教室Sに参加していた。そこでの主な活動は、週に一度2時間、近隣に在住している外国人に対する日本語学習支援である。筆者は、そこでの約2年間の活動を通し、教室を運営している日本人参加者が「先生」、外国人参加者が「生徒」という位置づけにあることに気がついた。場が教室であるという点からは当然の名称とも考えられようが、同時に日本人参加者は日本語教師ではなく、地域に住んでいる一般市民である。彼らは、外国人参加者から「先生」と呼ばれながらも日本語を教える技術に不十分さを感じ、また、不安を抱いている。以上の体験から、ボランティア日本語教室Sの「日本人」と「外国人」の関係性について考察することで、今後の地域の日本語教室の目指すべき姿を提示できるのではないかと考え、本研究に至った。

2. 先行研究

近年、日本人参加者は「日本語を教える人」であり、外国人参加者は「日本語を勉強する人」という「教える—教えられる」関係が批判されるようになった。「教える—教えられる」関係は、無意識的にもかわらず、「地域日本語教育」の現場にとって日常的であると懸念されている(許 2009)。古川・山田(1996)は、力関係を失くすには、参加者間の共同作業が必要であり、「外国人=学習者」の規定をやめるべきだと述べている。

日本語教室における「先生」と「生徒」について着目した先行研究には、森本(2001)とOHRI(2005)が挙げられる。両研究では、「共生」を目指す地域の相互学習活動を批判的に再検討し、その「先生」と「生徒」の関係性は権力関係を含んでおり、協働学習を妨げる要因になっていると述べてい

る。

3. 研究の課題と目的

本研究では、両参加者の意見から、「先生」と「生徒」という位置づけの現状を明らかにすることを目的とし、以下の2点を本研究の課題とする。

(1) 日本人参加者は、外国人参加者から「先生」と呼ばれているか。呼ばれている場合、「先生」についてどのように考えているか。

(2) 外国人参加者は、日本人参加者を「先生」と呼んでいるか。呼んでいる場合、「先生」についてどのように考えているか。

4. 研究概要

4.1 調査協力者

本研究の主たる調査協力者は、日本語教室Sの日本人参加者4名と外国人参加者3名である。そして、都内M区の日本語の会Kで活動をしている日本人参加者1名のインタビュー調査を分析に加えた。日本語の会Kは、交流を通して、お互いの文化を学び合い、助け合うことを目的としている。そのため、お互いを「～さん」で呼び合うことが会の一姿勢であり、この会の特徴である。以下は、調査協力者のプロフィールである。

【表 1：インタビュー調査協力者（日本語教室 S 日本人参加者）】

名前	JFSD さん	JFSN さん	JFST さん	JFSO さん
性別・年齢	女性・50 代	女性・50 代	女性・50 代	女性・60 代
国籍	日本	日本	日本	日本
母語	日本語	日本語	日本語	日本語
職業	主婦	主婦	主婦	主婦
活動歴	約 11 年	約 13 年	約 11 年	約 6 年

【表 2：インタビュー調査協力者（日本語教室 S 外国人参加者）】

名前	CFSN さん	BMSQ さん	BMSA さん
性別・年齢	女性・30 代前半	男性・20 代前半	男性・20 代前半
国籍	中国	インドネシア（バリ島）	インドネシア（バリ島）
母語	中国語	バリ語	バリ語
職業	主婦（夫も中国人）	農業実習生	農業実習生
滞日期間	約 6 年	2 年 8 ヶ月	2 年 8 ヶ月

【表 3：インタビュー調査協力者（日本語の会 K 日本人参加者）】

名前	JFKN さん
性別・年齢	女性・60 代
国籍	日本
母語	日本語
職業	会社員
活動歴	約 5 年 ¹

4.2 調査方法

ネウストプニー・宮崎（2002）を参考に、半構造化インタビューを行い録音、文字化した。

日本人参加者には、①活動中、日本人参加者同士は何と呼び合っているか、②外国人参加者から何と呼ばれているか、の質問項目を必ず含めた。外国人参加者には、①日本人参加者を何と呼んでいるか、②日本人参加者から何と呼ばれているか、の質問項目を必ず含めた。

なお、日本語教室 S の日本人参加者 JFSN さんと JFST さんは同時にインタビューを行ったため、複数インタビューである。

5. 分析と考察

調査協力者に行ったインタビューを録音・文字化し、重要だと思われるキーワードを拾い、分析を行った。

5.1 日本語教室 S の日本人参加者

調査結果から、①活動中、日本人参加者同士は「～さん」と名前で呼び合っているが、外国人参加者の立場に立つと、「先生」と呼ぶ傾向が強い、②活動中、日本人参加者は外国人参加者から「先生」と呼ばれていることがわかった。

(1)JFSD さんのインタビュー

JFSD さんによると、「教室の中では普通に何々さんですね。」と、日本人同士は名前で呼び合っているという。一方で、「生徒に対してあの人（他の日本人参加者）を呼ぶ時には、つつい『先生』って言うんですけど」という語りから、外国人参加者の目線に立つと、「先生」と呼ぶ傾向が強いことがわかった。JFSD さんは、名前で呼んでもらうようにしているという。「先生」と言う場合と言わない場合について違いはあるのか質問をすると、「差をつけたくない」という答えが返ってきた。

(2)JFSN さんと JFST さんの複数インタビュー

活動中、日本人参加者同士は「～さん」付けて呼んでいるが、外国人参加者からは「先生」と呼ばれていることがわかった。そして、日本人参加者が「先生」と呼ばれている理由に、「名前が覚えられないから」と語った。また、JFSD さんのように、「先生と呼ばないで」と、外国人参加者に話していることが語りから明らかになった。

(3)JFSO さんのインタビュー

JFSO さんの、「教えてる手前『先生』ってしてます」という語りから、自分を「先生」と位置づけていることが読み取れた。外国人参加者が日本人参加

者を「先生」と呼ぶ理由には、①便宜上の「先生」、②馴れ馴れしさを回避するための「先生」の二点を挙げている。また、「先生」と呼ばれることについて、「あんまりこだわらない」、「気にしていません」と語っており、「先生」と呼ばれる事への抵抗も他の3名に比べてあまり無いように感じられた。

5.2 日本語教室 S の外国人参加者

(1) CFSN さんのインタビュー

CFSN さんの、「最初来た時は勉強の目的で来たんですよ、『生徒』として。だからみんな『先生』。(中略) 日本語以外にもいろいろ教えてください」という語りから、「生徒」という前提の上で活動に参加していたことがわかった。また、実際の活動では教えてもらうことが日本語だけではなかったことが読み取れた。「先生」と呼ぶことについては、「尊敬」の意味を含めていると語った。

(2) BMSQ さんと BMSA さんのインタビュー

BMSQ さんは、「先生」と呼ぶ理由について、「知らない事が教えるから、『先生』と語っている。そして、「先生」と呼びながらも日本人参加者の名前を覚えている。しかし、日本人参加者からは、「あなた」と呼ばれており、名前を覚えられていないことが明らかになった。

BMSA さんも同様に、「本当は先生じゃなくても、教える、何かいろんな事教えるから」と語った。また、「勉強する所だから『学校』という語りから、日本語教室 S を「学校」、「教室」と捉えていることがわかった。そして、『先生』って呼んで(る)けど、何か自分の『お母さん』と違って」という語りから、JFSO さんを自分の母親のように思っていることがわかった。

日本人参加者は「先生」と呼ばれている理由に、「名前が覚えられない」、「教える人への配慮」を挙げている。しかし、外国人参加者は日本人参加者の名前を覚えており、「呼び名」に参加者それぞれの思いを込めている。外国人参加者が思っている通りには日本人参加者に伝わっていないことが明らかになった。

5.3 日本語の会 K の日本人参加者

参加者同士は「さん」と呼び合うことを活動のスタンスとしていながらも、実際は、日本人参加者を「先生」と呼んでいる外国人参加者がいることがわかった。その理由として、JFKN さんは、日本人参加者の名前が覚えられないことを挙げている。また、

名前が思い出せず言葉に詰まったり、無理に名札を覗き込んだりしてまで、日本人参加者を名前前で呼ぶことへ疑問を感じている様子も読み取れた。同じ市民としての交流を出発点として、お互いを名前前で呼び合うことは、相互を理解するための重要な要素である。しかし、実際は困難点があることがわかった。日本語教室 S では、呼び名へのスタンスが無く、日本人参加者は「先生」、外国人参加者は「生徒」と呼ばれているが、実際は呼び名の背後にそれぞれの参加者の思いが込められている。その事例から日本語の会 K の実態を考えれば、「先生」と呼ぶ外国人参加者は、必ずしも名前を覚えられないだけの理由ではないはずである。

6. まとめと今後の課題

外国人参加者へのインタビュー調査から、「先生」と「生徒」という位置付けがされているものの、その関係性は力関係だけではないことが明らかになった。外国人参加者は日本人参加者を「先生」と呼びながらも、「尊敬」「友人」「母親」など複数の感情を込めている。「教える-教えられる」関係はできているが、単なる「先生」ではなく、「相談相手」「友達」「お母さん」という存在に変化している。それに対し、日本人参加者は、「先生」と呼ばれることに疑問を感じず、そこにどのような感情が込められているか知らずにいる。「呼び名」において、意識のずれが生じているのである。

本研究では、先行研究ではあまり扱われていない外国人参加者の意見を重視し、分析・考察を行ったことが特色だと言える。しかし、今回の調査では、中国とインドネシアバリ島という、アジア出身者への調査に留まり、欧米出身者への調査を加えることができなかった。今後は、より多くの参加者へのインタビュー調査を行い、精密な日本語教室の参加者間の関係性を明らかにし、地域の日本語教室の目指すべき姿について研究していきたい。

参考文献

- 中川聖一・小林聡 (1995) 「自然な音声対話における間投詞・ポーズ・言い直しの出現パターンと音響的性質」『日本音声学会誌』51 巻 3 号, 202-210.
- OHRI RICHIA (2005) 「『共生』を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討-母語話者の『日本人は』のディスコースから-」『日本語教育』126 号 日本語教育学会, pp.134-143

許之威 (2009) 「『地域日本語教育』とは何かー新たなパラダイムを目指した批判的考察ー」多言語化現象研究会 第1 会研究大会発表資料
古川ちかし・山田泉 (1996) 「地域における日本語学習支援の一側面」『日本語学』第 15 卷第 2 号 明治書院, 24-33
森本郁代 (2001) 「地域日本語教育の批判的な再検討ーボ

ランティアの語りに見られるカテゴリー化を通してー」野呂香代子・山下仁 (編著) 『正しさへの問いー批判的社会言語学の試みー』三元社, 215-247
J.V.ネウストプニー・宮崎里司 (編) (2002) 『言語教育の方法』くろしお出版.

いちかわ きょうこ／桜美林大学大学院 修了生
gongzi@hotmail.co.jp